お蝶

水野仙子

お蝶がよく世話をしてくれる。今度千代さんが來る時に、半襟でも買つて來て下さい。明日は受持の代る日で鬮を引かなければならないといつて私と別れるのを悲しんで居た。

或日私はこんなことの書き添へてある夫の手紙を受取りました。藪から棒にこんなことを言はれまして、私は一寸まごつきましたが、直ぐにそれは宿の女中であることを悟りました。ふと私の胸には、二十ばかりの丸々とした、憎氣のない絶えず笑顔でばかりものを云ふ、女中なぞするやうな女ぢやないのだけれど譯があつてといふやうな、そんな女の顔がちらと泛んで消えました。空想といふものは一瞬時のうちに、微細なそして意表に出た働きをするものです。でも私は別段深くも氣に

とめず、其手紙を卷き終りましたが、それでも返事には忘れずにお蝶の年齢を聞いてやりました。半襟の柄の見立てやらがあると思ひましたので。すると折り返しての手紙の中に

お蝶は色の黒い醜い顔の女さ、年は二十四とか言ふことだが千代さんよりはずつと老けて見える。といふやうなことが 書いてありました。 私は想像が外れた飽氣なさを一寸馬鹿々々しく思ひました。又それで安心したやうな心の傍から、お蝶は色の黒い醜い顔の女さとさも私にだから餘計な心配はするなと言つてあるやうな文句を見まして、もしや知らず〳〵手紙の中の筆先に、はしたない閃きを見せたのぢやなかつたかしらと、極りの惡いやうな氣もいたしました。それからは不思議にもお蝶といふ名がなんとなく氣にかゝるものとなりました。

越えて七日ばかり、祖母の病氣もどうやら大丈夫らしくなりましたので、私もいよ〳〵那須を出ることになりました。もと〳〵この夏は二人で約ましく海邊の生活をする積りでありましたのを、その間際になつて私は突然私をこの上もなく可愛いがつてくれる祖母の病氣の電報を受取つて、慌てゝ那須に歸らなければならなかつたのでございます。その時私どもは結婚後まだ一週間ばかりのものでございました。少しく體を毀して居りました夫は一足先に海にまゐることゝなり、私は上野から、夫は兩國から上総へと、別れ〳〵に立つたのでございました。

ぼんやりとした意識を汽車に搖られて四時間ばかり、大原の終點驛に著いて扉を開けて出やうとした時、白絣姿の夫がつと目の前に立つて私の手の袋を取つてくれました。麥藁帽子の下に見た顔の色の黒くなつて居りましたことしみ〴〵物言ふ隙もなく直ぐに車を列ねて宿に向ふ途中、もの

珍しい漁村のさまをとみかうみしながら、濱の匂ひのだん〳〵近づくにつれ、私の頰には言ひ様のない嬉しさと滿足の血が燃えるのでした。

碎けて散つて白く飛ぶ濤(なみ)に濡れるほど近く岩についた道をのぼつて、やがて車は岬の上の宿に著きました。庭を掃いて居りました一人の婢(をんな)が、車の音に振りむいて私達の姿を認めますと、急に笑顔を家の中にむけて何か言つたらしく、外の光りに馴れて來た眼には薄暗く見える檐先(のきさき)に、白い顔が後から〳〵と浮び出て、四五人の婢が廊下に竝(なら)びました。

『お歸んなさいまし』

『いらつしやいまし』

口々に聲をかけて車から降りたら私達を見くらべて、婢共はみな輕く微笑んで居ます。揃へられた赤い緒の草履(ざうり)をつきかける途端にちらと夫の顔を見ると、冷かされまいと豫防したやうだと思はれる至極眞面目な顔をして居りました。やゝ後れ走(は)せに廊下に手をつかへて

『いらつしやいまし』

『お歸んなさいまし』

と目を伏せた女、私は直ぐにそれがお蝶なのを悟りました。お蝶は眞面目な顔をして居りました。

私はとう〳〵夫の所謂 My room に入りました。

かう思つて微笑をむけながら

『只今』と輕く手を支(つか)へました。それは趣きあるやうに寫つて居る海樓の二階のはづれの一間をM

yroomと矢線をひいた夫からの繪端書を思ひ出したのでございました。私は汗になつた著物を浴衣に更へやうとして袋の紐を解きながらふと

『あの、さつき一番後の方に居た、あのあれがお蝶さんでせう？』と言ひますと

『うんあの梯子段の際に居たのがね、今日はいやに眞面目腐つた顔をしてた』

はた〳〵と足音がしてそこにお蝶がお茶道具を持つてはいつて來ました。

『お暑うございましたでせう。旦那様がまあ先達てからお淋しがつていらして……お話合手がないものでございますからね。奥様がいらつしやるつて話を伺つたものですから私どもゝ大變お待ち申して居りました』

お蝶は伏目勝にかう云つて、脱ぎ捨てた私の著物を衣桁にかけたり帶を疊んだりして居ります。

『主人が大變いろ〳〵お世話になりましたさうですね、ちよい〳〵そんなことが手紙に見えたものですから私も安心して居ましたどうぞ何分よろしくお賴みしますよ』

私は言はうと思つたこれだけのことすらお蝶に言ひませんでした。それは面弱な私の性質が、夫をわがもの顔に妻ぶつた口を利くのがお蝶に對して何となく憚られた故でございました。そしてそれだけ私はまだ夫に遠慮と隔てがあるのをうすら淋しく思はない譯にはゆきませんでした。私は私がいつも言葉を補ふ時によくするやうな笑顔をもつて、たゞ

『お世話になります』とあつさり挨拶をしました。

二週間目ほどで會つて見ると、私はまた夫の前に恥かしさが新しくありました。胸に流れた嬉し

さを包んで私は何を話していゝやら珍しく煙草なぞを燻らして居る其前につゝましく座つて、問はれるまゝに祖母のことなぞを一言二言話して居ますと、お蝶は鏡臺を持つてはいつて來て部屋の隅に据ゑ

『奥様お風呂をお召しなさいまし』と閾際に手をつかへました。私はその時もお蝶がなぜものをいふ時に目を伏せるのか、それが自分に對した時ばかりではないかしらとさへ思はれて、なんとなく氣にかゝるのでございました。

風呂あがりの肌を潮風にふかせながらしと〳〵と鹽氣をふいた欄にもたれて、浪は浪を追うて走つては岸に頽れ、戯れ合ふやうに、またすねてゞも居るかのやうに、果てしなく、たゞ果てしもなく漂つて居る海の面を、飽かず〳〵眺めて居るうちに日は昏れかけました。器物の觸れ合ふ音に氣がついて振りむくと、お蝶が膳を捧げてずつと私の背を拔けて部屋に入つて行きました。外した眼を再び波の面にやると、湛へた光りは際だつてその力を弱めて居ました。

『千代さん』

聞き馴れた懐しさの其聲は夫で、われにかへつたやうなはつきりした意識の中に振り向くと、調べものゝ頁を閉ぢて夫は反り氣味に私の脇に立ちました。簾戸の影に洋燈はともつて、散らかつた新聞や雜誌などを片づけるお蝶の姿が、薄い影法師となつて私の脇に動いて居ります。

『さあ飯だ〳〵』と夫は勢ひよく部屋にはいつてどつかと座蒲團の上に座ると、お蝶は私のもそれと竝べて直して、

『どうも遲くなつて相濟みません、私一寸大原まで行つてまゐつたものですから……』

と給仕の盆をひき寄せてきちんと坐りました。夫との間に交される會話は、客の有無とか天候の具合とか、普通の世間話に過ぎませんでしたが、お蝶は夫に對してもやはり目を伏せて語りました。

耳に馴れぬ濤(なみ)の音が闇を運んで、簾戸を濾(こ)して入る風は涼しく部屋に滿ちました。疲れたらうからと夫はお蝶を呼んで早目に床をのべさせましたが、お蝶は甲斐〴〵しく夫の背に廻つて寢卷を著(き)更(か)へさせたりして居ます。『あ、あれは私のしなければならないことであつた』かう思つて私は部屋の隅に寢卷の袖に手を通しながら、全くよく届くお蝶の世話ぶりを淋しい氣持で蚊帳越しに眺めて居ました。

眩しい秋の光りと婢達の目を逃(のが)れるやうに、そこ〳〵に顔を洗つて部屋にかへると、お蝶は梅干に楊子をつけて朝茶をすゝめて、昨夜廊下の闇で一寸握らせた半襟の禮なぞを改めて 云ふ のでした。私は夫の前にそれがどんなに極りわるかつたでせう。朝餉(あさげ)の時お蝶はふと今日が初日だといふ花村座の話などを初めました。わざ〳〵ビラを持つて來てくれたのを見ると、嘯(うそぶ)いて居る男の前に髪を亂(みだ)した女の頽(くづを)折れて居るところや、闇の夜に身を捨てようとしてゐる女を若者が抱きかゝへて居るところなぞの場當りが、挑發的に描かれてありました。で夫が晩に三人で行つてみようといひ出しますと、お蝶は遠慮らしくそれを承知しました。

晝過ぎ私は何とも知れぬ疲れに襲はれて、日課の調べ物をして居る夫の後に枕をひき寄せて横になつて居ました。ふとお蝶の聲が耳に這入つたと思つた時、ふはりとした搔卷の重さが足のあたり

に感ぜられました。私はもう其時起きあがりたいやうな氣分でしたけれども、お蝶の好意を無にするのもと思つて其まゝ目をつぶつたまゝにして居ました。お蝶はそのまゝ閾際に座つて柱に背をもたせたらしく、夫に煙草の火をつけてやる氣あひなどして居ましたが、ぽつり〳〵と宿の内儀(ないぎ)の噂さや料理人の意地わるい話などをして居ます。その調子がどことなくかう打ち解けた、私の前に見えるやうな固つたところがないやうに私には思へました。そこへおすみおつねなどゝいふ婢どもがやつて來まして、はしたなくまぜつかへしたり笑つたりして一方ならぬ賑かさになりました。婢共はみな夫を花井さん〳〵と馴々しく呼んで居ました。それはまだ夫が書生であるのと、長い逗留客に對する親みからでもありませう。

『さあもういきませう、追ひ拂はれないうちに』とおすみがばた〳〵驅け出して行くと

『待つてゝ頂戴よ私も行くから』とお蝶の珍らしくはしやいだ聲がします。

『まあ御ゆつくり遊ばせよ、奥樣』

おつねはかう言つておすみの後を追うて驅けて行きました。私は何がなしはつとして益々起きあがる場を失ひました。

『それではお伴いたしませう』とその日の夕方お蝶はさつぱりした浴衣に著替へて私達の部屋に來ました。二間と離れゝば白地の浴衣がほのかになる程暗い夜で、浪の音に遠ざかつて行く足音が、小刻みに一つは荒く、お蝶の草履はひた〳〵と其後から續いて來ました。

『まあ暗い、提灯を持つてくればようございましたねえ』とお蝶はたび〳〵かう繰り返しました。ま

た、

『奥様の割にお早いこと、私はまたこれで精一ぱいなんでございますよ、花井さんあんまりお早いんですもの』と息を切らして居りました。醜い――といつても惡感を催させるやうな顔ではなく、たゞ色が黒いのと少し頰骨が高いのがお蝶の爲に損なところでしたが、別段粧ふとしないところにまた垢抜けのした氣持よさがありました。尤も生れは本郷の切通し下といふことでしたから――割にはお蝶はあまり健康らしくは見えませんでした。

花村座といふのは、大原の町近くに此頃建てられた舞臺で、夜目には原とも畑とも見分のつかぬ吹き通しに、アセチリン瓦斯をともして道行く人を呼んで居ました。その灯のぐるりを澤山のかね蟲が飛び廻つて居ました。三枚の札を買つて中にはいると、雜な鉋目のざら〳〵とした桝に、避暑客がちら〳〵何處やら整はぬ場内を綴つて見えました。木の音も厭に耳に響いて幕があくと、伯爵の病室にスリツパも履かない人達がうろ〳〵と出たりはいつたりして其言葉といひ其容子といひ、微笑まずには居られないやうな演じぶりでございました。

『まあ酷いことをするんでございますねえ！』とお蝶は熱心に見入つて居ますので餘所見をして居た目をつひ誘はれて舞臺にやると、目のきつい丸髷に結つた女が、伯爵に毒を飲ませて、其苦しみもがくのを膝の下にして口の中にハンケチを押入れて居るところでした。

歸りは殊に道の暗さを感じました。お蝶はさきから齒が痛むと言つて冴えない顔をして居りましたが、疲れたせいもありませうけれど、三人は默つて一語も語らずに雨戸の閉つた宿に著きまし

た。浪の音の調子によつて、引く波寄せる波の、それと見分けられる程海の面の暗く〳〵荒れて居る夜でございました。

明けて見れば火を運んで來る婢はおつねなのでありました。お蝶は午過(ひるす)ぎに一寸顔を出して今日から受持(うけもち)が違つたことを告げ、

『折角奥様もいらしたからと思つてましたのにほんとにお名殘も惜いけれど……今度こちらの方はおつねさんの番になりました。おつねさんは面白い人だからようござんせう、私は今度松ですの、それでもまたちよい〳〵お伺ひしますから、御用があつたら何時でも仰言(おつしや)つて下さいまし、どうせこの二三日は暇なんだからまた寄せて頂きます。あのそれは出しますんですか?』とお蝶は机の上に置いた私の手紙を手に取りました。その筆くせの『ちよ』と小さく書いた字は、那須の山奥から毎日こゝの海岸へ、幾度お蝶の目を受けて夫の手には渡つたでせう、そんなことまで思はれながらお蝶の去るのが私にはなんとなく頼りなくも亦、心持の自由になれるのが嬉しいやうにも思はれるのでございました。

おつねは氣のさくい話の面白い女でした。どちらかといへば私の心はその蟠(わだかま)りなさを喜びました。おつねの前では夫への仕向けも心のまゝにすることが出來ました。朝晝晩の給仕に侍べられても、なんとなく氣のつかへるやうなことはおつねになつてからありませんでした。おつねは氣經にお夕飯がすんだらあの岩の上に御案内しませうなどゝ、私達を連れて宿の前の岩道を先に立つて下りて行きました。濱菊の裾を引く岬の道を分けて、蔓草にたよりながら危いところも辛(からう)じて降りて

行きました。先へ〳〵と行くおつねの姿を見失はないやうに、私は胸を躍らせながら夫の後に續きました。飛沫の足許に近い岩の上に立つて振りかへると、宿の半面は高く遠く薄暗にたつて見えます。その二階の欄干(てすり)に近く立つて、朧な顔がこちらを向いて居る姿を見つけた時、『お蝶さんでせうあそこに立つてるのは』と私はたちどまりました。

『さうぢやないだらう――いや、さうだ〳〵』

『さうでございますよ、お蝶さんですよ』とおつねもたちどまりました。私と夫は同時に手を振りあげて合手(あひづ)をしました。すると豆粒ほどの姿もそれを受けて動いてみえました。お蝶は私達の姿が岩の出鼻に現はれた頃から絶えず目を放さず見て居たものと見えます。さう思ふと私は、岩から岩にうつる時なぞに夫に手をひかれたことなぞが、恥かしくも亦得意に思ひ出されるのでございました。それにしてもお蝶は今どんな氣持がしてゐるだらうと思うて、隱れ岩を越す浪の一かへり〳〵毎にこめて行く夕闇のやうな寂しさが、私の胸にも覺えられるのでございました。

凪(なぎ)の日が續いて共同海水浴場(きようどうかいすゐよくぢやう)には砂に伏す人が日に〳〵多くなりました。青く澄んだ海の面に浮く頭の數を、櫓の上に見張る救護員の赤い帽子に日がぢり〳〵と照つて、茶屋の裏手の葦簾(よしず)には貸浴著が絶えず乾かされて居ります。或日も夫につれられて少しばかりの潮を浴び、宿にかへつて夫が風呂を浴びる手助けをしながら、輕い氣持になつてローレライを小聲に口ずさんで居ますと、岩を刳(く)りぬいて作られた風呂場の外を、草履でゆく人の姿がちらと見えましたので、窓からのびあがつて塀越しに見ると、半幅の帶を男結びにして脇帶に手をさし入れたお蝶が、もの思はし氣な風

をして過ぎて行くのでした。私はこの二日ばかりお蝶の姿を見なかつたのを思ひ出し、それに輕い氣持が手傳つて、

『お蝶さん！』とちよいと振りむかせる位の積りでかう呼んでみました。お蝶は一寸足取りをとめて振りかへりましたが、私を認めると

『あら奥さんでしたか』とそのまゝ引つかへして道に向いた風呂場の口からはいつて來ました。其姿がなんとなくしほ〳〵として居りました。

『浴場に行つてらつしやいましたの』と湯槽(ゆぶね)の中を覗いて夫と顔を見合せ

『まあ隨分此頃は黒くおなんなすつたのねえ』

『暫く見えなかつたねえ君、どうかしたの？』

『どつか惡いの？』と私は同時にかう問ひかけました。

『えゝ……』

お蝶は曖昧に返事を鈍らして胸のあたりを押すやうにして居ますから、

『ほんとにどつか惡いんでせう？』と重ねていひますと

『えゝ、すこうし胃がわるいもんですから昨日から寢(やす)んで居ました。痛むんですのこゝが』と乳の下をさして見せました。

『そりや不可(いけな)いね。醫者に見せたらいゝぢやないか、顔色も惡いやうだよ』

『えゝ大したことはないんですわ、やつぱり胃がわるいんだつて言はれました。今日はもうよほど

いゝんですもの、今一寸大原まで行つて來やうかと思つて出かけたとこなんですの――御無沙汰して〻すみません』

お蝶はめつたに笑顔をしない女だと思ひます。長い睫毛(まつげ)をいつも伏せて『え〻……』と煮え切らぬ返事を前におくのが其癖でございました。さうは思ひながらも其都度、私は聞くべきことでないことを聞き出さうとしたやうな、我ながら妙ないやな感じがしたり、我身の年が行かぬのを思つて口を噤(つぐ)んでしまつたりいたすのでした。

『私もう東京に歸つてしまはうかと思つて……』とお蝶は暫くしてこんなことを言ひ出しました。

『どうして？』と顔を見た二人の視線を外すやうにして

『九月になつたらどうせ歸る積りでしたけれども〻うなんだか厭になりましたから……それに此節のやうに隙ぢや私一人つ位居ないたつてさう困りもしやしないでせうから』

『どうかしたの？なんかあるんぢやないか？』

『そんなことはないで私達もどうせ九月になつたら歸るんだから一緒に歸りませうよ、ねえお蝶さん』と私は馴々しくかう言つてみました。

『え〻……』とお蝶は相變らず生返事をして凝(ぢつ)乎と何事か考へて居るやうでした。私はふとお蝶のかういふ態度が憎いと思ひ出しました。

一つ捕(とら)へて來たの〻胴(どう)を縛つて、絲(いと)の限りに横に這ふのを引き戻し〳〵、つ〻いたり怒らせたり一晩弄(もてあそ)んだ岩蟹を、そのま〻に忘れて寢て覺めた朝、絲は廊下に竝んだ草履の緒に搦(から)められたま

ま、蟹の姿は何處にもないのをもの侘しく思ひやつて居るところへ、おつねが慌しく一通の電報を持つてはいつて來ました。それは那須の家から私へあてたもので、祖母の病氣が急に革つた知らせなのでございました。私は思ひの外其時心が確かであつたのを不思議に思ひます。私は私がこの濱邊を去つたあとのお蝶を思ひやることも出來たのでした。夫はやはりひとり殘ることになつて、私は直ぐに旅立つ用意を初めました。

おつねに聞いたといつてお蝶は間もなく私の部屋に見えました。今日は一束の銀杏返しに結うて、初めて氣のついたお蝶の左の指には五分ばかりの指輪が箝めてあるのでした。

『まあ御心配でございませうねえ、折角まあお馴染になりましたのに』とお蝶は度々こんなことを繰りかへしながら、私の後に廻つて背中の皺を作つてくれたり帶を結んでくれたりしました。きちんとして大變氣持がようございました。これならば兩國に著くまでゆるみつこはないなどゝ思ひながら、私は殘り惜しく夫に別れを告げました。

慌たゞしく來て慌たゞしく歸る私を、婢共はまた廊下に揃つて見送つてくれました。おつねとお蝶は下駄を履いて私の車近くに寄つて、又近々にお出でになられるやうになるのを祈つて居りますといひました。

『それではあとをよろしくお賴みしますよ』

私はお蝶の方に目を向けてかう言つて、ぱつと洋傘をひらきました。途端に車は徐ろに宿と人々とを後にしました――――。（完）

【入力者注】

底本は総ルビですが、ルビは一部のみ残しました。

底本と行を合せるために、空白を挿入したり、句読点のサイズを小さくした箇所があります。

以下の修正を加えました（数字は底本の頁-行）。

28-5　擔先　→　檐先

32-4　理料人（れうりにん）の　→　料理人の

33-1　また。　→　また、

34-4　受様（うけもち）が　→　受持（うけもち）が

34-6　番になりましたおつねさんは　→　番になりました。おつねさんは

底本：「臺灣愛國婦人」第三十八巻　26-38頁
　　明治四十五（1912）年一月
テキスト入力：小林　徹
公開：令和七年七月二十一日
修正：令和七年七月二十二日
リンク：水野仙子作品年譜

【謝辞】　本作品を発見してご提供下さいました菅野俊之様に厚く御礼申し上げます。